

無財の七施

昨日は運動会ごころうさまでした。私も久しぶりにたくさん仲間たちや、なつかしい保護者の皆様に出会えて嬉しかったです。それ以上に嬉しかったのは、職員のみなさんがとても良い笑顔で仲間たちに接していられたことです。やはり笑顔というものは、相手に対する「愛情」から生まれてくるものなのでしょうね。

福祉、教育の分野では、多くの人の座右の銘となっている『この子らを世の光に』で知られる、障がい者福祉の大先輩である滋賀県立近江学園の初代園長であった故糸賀一雄は講演の中で次のように話されています。

「私たちの仕事や人間関係において《愛》が根底にないといけない。人間というものが一人育っていく、そして教育者も育っていくところのプロセス、そういう互いの育ちの中に《愛》も育っていく。年季はかかるけど《愛情》から発して《愛》に到達する。潜在的に私たちの心のどこかに、本当の《愛》とはなんであるかということを知っているからなんです。」あるいは自分を見つめるところ

の愛、そういうものに私たちの心というものは成長していくわけです。」

と話されています。

そして人間関係の中の《愛》として、【無財の七施】というものを説明されています。

【無財の七施】

一、『眼施』（げんせ）

「人にやさしいまなざしをもって接することです。」

二、『和顔悦色施』（わがんえつじきせ）

「にこやかな微笑みをたたえた顔です。怒った顔をして人に接するより、にこやかな顔で接するのは、とてもいいことです」

三、『言辞施』（げんじせ）

「言葉の美しさです。どなったりした時の声はよくないです。子どもたちにもやさしい声で接するのはいいですね」

四、『身施』（しんせ）

「勤労奉仕のこと。働くということとは、健康な身体を持っている人には誰でもできることですね」

五、『心施』（しんせ）

「感謝の心です。ありがとう、サンキュー

ー・ベリマツチということね。万国どこへ行っても、サンキュー・ベリマツチでいけますね」

六、『林座施』（しんざせ）

「席をゆずってあげることです。乗り物でおばあさんに席をゆずってあげることは、誰でもできますね」

七、『房舎施』（ぼうじゃせ）

「これは一宿一飯の施しということですよ。一杯のご飯でも半分あげられるし、また宿を貸してあげることだってできるでしょう」

以上のように、糸賀氏は「財産なんか何もないという人でも、七つの姿で差し上げるものがある」と言っています。

どうでしょう？あれがないから、これが足りないからでなく、私たちにも今日からできることがあるように思います。

みんな【素敵な笑顔のある仁万の里】【すべての人にやさしい仁万の里】にしていきたいと思います！

2017・4・16 はやかわ便り二号